

黒衣聖母

芥川龍之介

青空文庫

——この涙の谷に呻うめき泣きて、御身おんみに願いをかけ奉る。
 ……御身の憐みの御眼おんめをわれらに廻めぐらせ給え。 ……深く
 御柔軟ごじゆうなん、深く御哀憐、すぐれて甘くまします「びるぜ
 ん、さんたまりや」様——

——和訳「けれんど」——

「どうぞです、これは。」
 田代君たしろはこう云いながら、一体の麻利耶観音マリヤかんのんを卓子テーブルの上へ載
 せて見せた。

麻利耶觀音と称するのは、きりしたんしゆうもん切支丹宗門てんしゆきよ禁制時代の天主

教徒が、うと屢しばしば聖母麻利耶の代りに礼拝した、多くははくじ白磁の觀音

像である。が、今田代君が見せてくれたのは、その麻利耶觀音の

中でも、博物館の陳列室や世間普通のしゆうしゆうか蒐収家のキャビネット

にあるようなものではない。第一これは顔を除いて、他はことごと

とくこくたん黒檀を刻んだ、一尺ばかりの立像である。のみならず頸の

まわりへ懸けたじゆうじかがた十字架形のようらく瓔珞も、金と青貝とを象ぞうがん嵌した、

極めて精巧なさいく細工らしい。その上顔は美しいげぼり牙彫で、しかも唇に

はさんせし珊瑚のような一点の朱まで加えてある。……

私は黙つて腕を組んだまま、しばらくはこのこくいせいぼ黒衣聖母の美しい

顔を眺めていた。が、眺めている内に、何か怪しい表情が、象牙

の顔のどこだかに、漂ただよっているような心もちがした。いや、怪しいと云ったのでは物足りない。私にはその顔全体が、ある悪意を帯びた嘲笑を漲みなぎらしているような気さえしたのである。

「どうです、これは。」

田代君はあらゆる蒐集家に共通な矜ほこり誇の微笑を浮べながら、卓テ子ーブルの上の麻利耶観音と私の顔とを見比べて、もう一度こう繰返した。

「これは珍品ですね。が、何だかこの顔は、無気味ぶきみな所があるよ
うじやありませんか。」

「円満えんまんぐそく具足の相好そうごうとは行きませんか。そう云えばこの麻利耶観音には、妙な伝説が附随しているのです。」

「妙な伝説？」

私は眼を麻利耶観音から、思わず田代君の顔に移した。田代君は存外真面目な表情を浮べながら、ちよいとその麻利耶観音を卓テ上トの子の上から取り上げたが、すぐにまた元の位置に戻して、

「ええ、これは禍を転じて福とする代りに、福を転じて禍とする縁起えんぎの悪い聖母だと云う事ですよ。」

「まさか。」

「ところが実際そう云う事実が、持ち主にあつたと云うのです。」

田代君は椅子いすに腰を下すと、ほとんど物思わしげなとも形容すべき、陰鬱な眼つきになりながら、私にも卓テ子トの向うの椅子へかけろと云う手真似をして見せた。

「ほんとうですか。」

私は椅子へかけると同時に、我知らず怪しい声を出した。田代君は私より一二年前に大学を卒業した、秀才の聞えの高い法学士である。且また私の知っている限り、所謂超自然的現象には寸毫の信用も置いていない、教養に富んだ新思想家である、その田代君がこんな事を云い出す以上、まさかその妙な伝説と云うのも、荒唐無稽な怪談ではあるまい。――

「ほんとうですか。」

私が再び念を押すと、田代君は燐寸の火をおもむろにパイプへ移しながら、

「さあ、それはあなた自身の御判断に任せるよりほかはありません

まい。が、ともかくもこの麻利耶マリヤ観音には、気味の悪い因縁いんねんがあるのだそうです。御退屈でなければ、御話しますが。――」

この麻利耶観音は、私の手にはいる以前、新潟県のある町の稲いな見なみと云う素封家そほうかにあつたのです。勿論骨董こつとうとしてあつたのではなく、一家の繁栄を祈るべき宗門神しゅうもんじんとしてあつたのですが。

その稲見の当主と云うのは、ちようど私と同期の法学士で、これが会社にも関係すれば、銀行にも手を出していると云う、まあ仲々の事業家なのです。そんな関係上、私も一二度稲見のためにある便宜を計ってやった事がありました。その礼れいごころ心こころだつたのでしよう。稲見はある年上京した序ついでに、この家重いええじゆう代だいの麻利耶

観音を私にくれて行ったのです。

私の所謂妙な伝説と云うのも、その時稲見の口から聞いたのですが、彼自身は勿論そう云う不思議を信じている訳でも何でもありません。ただ、母親から聞かされた通り、この聖母の謂われ因縁をざつと説明しただけだったのです。

何でも稲見の母親が十か十一の秋だったそうです。年代にする
と、黒船が浦賀の港を擾がせた嘉永の末年にでも当りますか——
その母親の弟になる、茂作と云う八ツばかりの男の子が、重い癩
疹に罹りました。稲見の母親はお栄と云って、二三年前の疫病に
父母共世を去って以来、この茂作と姉弟二人、もう七十を越した
祖母の手に育てられて来たのだそうです。ですから茂作が重病に

なると、稲見には曾祖母そうそぼに当る、その切髪きりがみの隠居の心配と云うものは、一ひと通りとおや二ふた通りとおではありません。が、いくら医者が手を尽しても、茂作の病気は重くなるばかりで、ほとんど一週間と経たない内に、もう今日きょうか明日あすかと云う容体ようだいになつてしまいました。

するとある夜の事、お栄のよく寝入つている部屋へ、突然祖母がはいつて来て、眠むがるのを無理に抱だき起してから、人手も借りず甲斐甲斐しく、ちやんと着物を着換えさせたそうです。お栄はまだ夢でも見ているような、ぼんやりした心もちでいましたが、祖母はすぐにその手を引いて、うす暗い雪洞ほんぼりに人氣ひとけのない廊下ろうかを照らしながら、昼でも滅多にはいった事のない土蔵どぞうへお栄をつ

れて行きました。

土蔵の奥には昔から、火伏せひぶの稲荷いなりが祀まつつてあると云う、白木しらぎの御宮みみやがありました。祖母は帯の間から鍵かぎを出して、その御宮の扉を開けましたが、今雪洞ほんぼりの光に透すかして見ると、古びた錦の御戸帳みとちようの後に、端然と立っている御神体は、ほかでもない、この麻利耶観音なのです。お栄はそれを見ると同時に、急こおろぎに鳴く声さえしない真夜中の土蔵が怖くなって、思わず祖母の膝すねへ縋すがりついたまま、しくしく泣き出してしまいました。が、祖母はいつもと違って、お栄の泣くにも頓着せず、その麻利耶観音の御宮の前に坐りながら、恭うやうやしく額ぬかに十字を切つて、何かお栄にわからない御祈ごきとうをあげ始めたそうです。

それがおよそ十分あまりも続いてから、祖母は静に孫娘を抱き起すと、怖がるのを頻しきりになだめなだめ、自分の隣に坐らせました。そうして今度はお栄にもわかるように、この黒檀こくたんの麻利耶観音へ、こんな願がんをかけ始めました。

「ビルゼンサンタマリヤさま童貞聖麻利耶様、私が天にも地にも、杖つえ柱はしらと頼んで居り

ますのは、当年八歳の孫の茂作と、ここにつれて参りました姉のお栄ばかりでございます。お栄もまだ御覽の通り、婿むこをとるほどの年でもございません。もし唯今茂作の身に万一の事でもございましたら、稲見の家は明日あすが日にも世嗣よつぎが絶えてしまうのでございませぬ。そのような不祥がございませぬように、どうか茂作の命を御守りなすって下さいまし。それも私風情わたしふぜいの信心には及

ばない事でございましたら、せめては私の息のございました限り、
 茂作の命を御助け下さいまし。私もとる年でございますし、アニマ靈魂
デウスを天主に御捧げ申すのも、長い事ではございますまい。しかし、
 それまでには孫のお栄も、不慮の災難でもございませなんだら、
おおかた大方年頃になるのでございましょう。何なにとぞ卒おんつるぎ私が目をつぶります
 まででよろしゅうございますから、死のアンジヨ天使の御おんつるぎ劍が茂作
 の体に触れませんよう、御慈悲を御垂れ下さいまし。」
 祖母は切きりがみ髪かしらの頭を下げて、熱心にこう祈りました。するとそ
 の言葉が終った時、恐る恐る顔をもた擡げたお栄の眼には、気のせい
 か麻利耶觀音が微笑したように見えたと云うのです。お栄は勿論
 小さな声をあげて、また祖母の膝に縋りつきました。が、祖母は

反かえつて満足そうに、孫娘の背をさすりながら、

「さあ、もうあちらへ行きましよう。麻利耶様は難ありがた有がたい事に、この御婆さんのお祈りを御聞き入れになつて下すつたからね。」と、何度も繰り返して云つたそうです。

さて明くる日になつて見ると、成程なるほど祖母の願がかなつたか、

茂作は昨日きのうよりも熱が下つて、今まではまるで夢中だつたのが、

次第に正しよつき気さえついて来ました。この容子ようすを見た祖母の喜びは、

仲々口には尽せません。何でも稲見の母親は、その時祖母が笑いながら、涙をこぼしていた顔が、未いまだに忘れられないとか云つてい

るそうです。その内に祖母は病気の孫がすやすや眠り出したのを見て、自分も連夜の看病疲れをしばらく休める心算つもりだったのでし

よう。病間びようまの隣とこへ床をとらせて、珍らしくそこへ横になりました。

その時お栄は御弾おはじきをしながら、祖母の枕もとに坐っていました。だが、隠居は精せいこん根も尽きるほど、疲れ果てていたと見えて、まるで死んだ人のように、すぐに寝入ってしまったとか云う事です。ところがかれこれ一時間ばかりすると、茂作の介抱をしていた年輩の女中が、そつと次の間の襖ふすまを開けて、「御嬢様ちよいと御隠居様を御起し下さいまし。」と、慌あわてたような声で云いました。そこでお栄は子供の事ですから、早速祖母の側へ行つて、「御婆さん、御婆さん。」と二三度搔かきまきまの袖を引いたそうです。が、どうしたのかふだんは眼慧めざとい祖母が、今日に限つていくら呼んで

も返事をする気色けしきさえ見えません。その内に女中が不審ふしんそうに、病間からこちらへはいつて来ましたが、これは祖母の顔を見ると、気でも違ったかと思うほど、いきなり隠居の搔卷すがきに継りついて、「御隠居様、御隠居様。」と、必死の涙声を挙げ始めました。けれども祖母は眼のまわりにかすかな紫の色を止めたまま、やはり身動きもせずまに眠っています。と間もなくもう一人の女中が、慌あわただしく襖を開けたと思うとこれも、色を失った顔を見せて、「御隠居様、——坊ちゃんが——御隠居様。」と、震え声ふるで呼び立てました。勿論この女中の「坊ちゃんか——」は、お栄の耳にも明かに、茂作の容態ようたいの変った事を知らせる力があつたのです。が、祖母は依然として、今は枕もとに泣き伏した女中の声も聞えない

ように、じつと眼をつぶっているのです。……

茂作もそれから十分ばかりの内に、とうとう息を引き取りました。麻利耶マリヤ観音は約束通り、祖母の命のある間は、茂作を殺さずに置いたのです。

田代君はこう話し終ると、また陰鬱な眼を挙げて、じつと私の顔を眺めた。

「どうです。あなたにはこの伝説が、ほんとうにあったとは思われませんか。」

私はためらった。

「さあ——しかし——どうでしょう。」

田代君はしばらく黙っていた。が、やがて煙の消えたパイプへもう一度火を移すと、

「私はほんとうにあつたかとも思うのです。ただ、それが稲見家の聖母のせいだったかどうかは、疑問ですが、——そう云えば、まだあなたはこの麻利耶觀音の台座の銘めいをお読みにならなかつたでしょう。御覧なさい。此処に刻んである横文字を。——DESIN E FATA DEUM LECTI SPERARE PRECANDO……」

私はこの運命それ自身のような麻利耶觀音へ、思わず無気味な眼を移した。聖母は黒檀こくたんの衣を纏まとつたまま、やはりその美しい象牙ぞうげの顔に、ある悪意を帯びた嘲笑を、永久に冷然と湛たたえている。

(大正九年四月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiya

校正：earthian

1998年12月28日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黒衣聖母

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>